

森清と草創期の鳥取県立鳥取図書館 —1931～1934年を中心に—

津村 光洋
(鳥取大学附属図書館)

はじめに

NDCの考案者として日本の図書館界に足跡を残した森清¹は、1931年6月より1934年11月まで約3年半にわたって鳥取県立鳥取図書館に勤務した。鳥取図書館は1931年7月に開館したばかりであったが、森はここで、その後半世紀以上にわたる司書としての経歴をスタートさせた。

森は後年、「鳥取在職時代のことは、忘れられない愉快的思い出が多い。それにもつとも楽しく働くことができたと思っている」²と度々回想している。しかし、鳥取図書館が開館されてから数年間の活動について調査を進めてゆくうち、鳥取時代が森にとって最も楽しく、充実した一時期であったことが、決して森の個人的事情によるものではないことが明らかになってきた。鳥取図書館は当時、地域の文化的な中心として、その歴史の中でも特に注目に値する活発な活動を展開していたのである。開館後数年間の鳥取図書館の活動については、既に鳥取県立鳥取図書館『鳥取県立鳥取図書館三十年史』(1961)³などに概要がまとめられてはいるが、それらはどちらかといえば断片的な記述や資料を組み合わせただけのものに留まっており、その意義や特徴についての総括的な研究はまだ見当たらない。

また、森については、彼自身による生前の雑誌等への数多くの寄稿文の他、特に森自身の回想をもとにまとめられた、もり・きよし『司書55年の思い出』(1991)⁴と、もり・きよし[述]「NDCと私」(1991)⁵の2つが、彼の経歴と仕事を知る上で貴重な文献となっている。しかし、NDCの改訂や図書館界への普及といった、森の残した多くの業績に関する客観的な視点からの分析や評価は、没後15年以上を経た現在でもまだ十分には行われておらず、最近ようやく少数の個別テーマの研究が現れ始めた段階である。2006年9月には、日本図書館文化史研究会により「もり・きよし—生誕100年—」と題したシンポジウム⁶が開かれており、今後さらに本格的な研究の進展が期待される。

そこで本論では、これまで彼の個人的な回想としてのみ語られることの多かった、森清の鳥取図書館時代に焦点をあて、開館して間もない当時の鳥取図書館の活動についてまとめ、森のその後の経歴の中で、鳥取図書館時代がどのような意義を持っていたのかについて考察してみたい。

森の来鳥

森が8年間勤めた、図書館用品を販売する大阪の間宮商店を退職したのは1930年(昭和5)12月半ばのことである。森自身の説明によれば、退職の理由は一種の「神経衰弱」による体調不良ということであった。後に述べる『ふぐるま』の中の自己紹介では、恋愛問題をその理由としてあげているが⁷、いずれにせよ、そうした精神面での体調不良のため間宮商店を退職した後、森は父の郷里であった岡山県邑久郡で休養生活を送っていた。そこに県立鳥取図書館の主席司書河野寛治と、県の社会主事細川隆から、鳥取に新設される

県立図書館への就職の誘いがきた。

主席司書の河野は元『鳥取新報』の記者であり、ジャーナリズムから図書館界に転じた人物であったが、森と河野の関係は、すでにその前年からあった。間宮商店に勤務していた森が、1929年に『圖研究』第1巻で発表した「和洋図書共用十進分類表案」は、翌年『日本十進分類法』(以下「NDC」として出版されていた。青森県立図書館など新設館を中心にすでにこれを採用していた館があったが、新たに設置されることになった県立鳥取図書館でもNDCが採用されることになった。そのため、間宮商店にいた森のもとに、河野からNDCについての長文の質問状が「毎日のように」送られてきて、森はそのたびに大阪府立図書館で同じ本の現物を探し、それを見て質問に答えたという⁸。

森は、鳥取での就職を間宮不二雄⁹に相談した結果、間宮に勧められて鳥取に行き、その時点でまだ採用が正式に決まっていなかったため、河野宅に仮泊することになった¹⁰。森の来鳥は1931年6月初めのことであるが、このとき新図書館はすでに完成しており、森は鳥取市西町131番地の河野の自宅から、毎日同じ町内の図書館に通い整理作業を手伝うことになった。森の記述によれば、彼の採用に対して県の中に反対意見があり、半月ほど後に間宮自身が鳥取を訪れ、県庁とかけあった結果、その翌日に正式採用の辞令が降りたという¹¹。森の正式な採用日付は1931年(昭和6)6月22日となっている。そのときは助手としての採用で、次年度から正式な司書とすることになったが、25円の給与だけでは生計が成り立たず、間宮商店からNDC研究費の名目で援助を受けた。森にNDC案の発表を強く勧めたのは間宮であり、森自身も間宮に対する恩を生涯忘れることはなかったが、鳥取図書館への就職に際しても、その陰に間宮の尽力があったようである。

鳥取図書館開館までの経緯

ここで、時間を遡って県立鳥取図書館が開館にいたるまでの過程を簡単に見てみたい。鳥取図書館の前史については、高田彬臣が論文¹²をまとめている。それによれば鳥取図書館の源は1890年(明治20)、因幡高等小学校内に専任校長の遠藤董が作った「久松文庫」とされている。1907年、小学校内から新たに鳥取県物産陳列場内に建設された建物に移された文庫は、「私立鳥取図書館」の名称に改められ、本格的な図書館としての活動を開始した。1918年には、私立鳥取図書館の建物、蔵書等が鳥取市に寄付され、市立鳥取図書館となった。なお、遠藤は本業は教育者であったが、一貫してこの図書館の育成に取り組んだ、まさに鳥取の図書館生みの親であった。

1927年12月、昭和天皇即位の御大典記念事業として、鳥取県会は県立図書館の建設を決定した。これに伴い、市立鳥取図書館は閉鎖して県に移管され、建物は売却されて取り壊され、同じ場所に県立図書館の新しい建物が建設されることとなった。

1930年4月、新図書館の建設工事が着工された。一方で、河野寛治が同年4月1日付で鳥取図書館の主席司書に就任し、8月より鳥取市内の仁風閣¹³において県に移管された旧市立鳥取図書館蔵書の整理作業が始まった。市立鳥取図書館の蔵書には十二分類によるものや未分類のものも多数あったが、「種々調査研究し、将来のことも考慮」¹⁴した結果、それらの資料を全てNDCによって再分類することが決定した。河野が開館時に新聞に寄せた記事からもNDC採用の理由を推測することができる。それによれば、他の多くの分

類表が「記号の十進といふ外観的模倣のみに止まって」いるのに対し、NDC は助記表や
相関索引を備え、機能面でデューイの分類の真髄を引き継いでいる点、将来の普及が期待
される点などが説明されている¹⁵。整理作業の担当職員は図書館の業務について知識のな
い者ばかりであったため、鳥取高等農業学校附属図書館主任の山根信の指導を仰いで作業
が進められた。河野から森のもとに手紙が寄せられたのも、恐らくこの作業の間のこと
であろう。12月に建物が竣工すると、資料は新図書館に移され、そこで引き続き準備作業が
行われた。

県立鳥取図書館の建物は、鳥取市西町に智頭街道に面して建っていた。兵庫県営繕課長
を務めた置塩章の設計による、ゴシック様式を模した鉄筋2階建て書庫4層の建物は、当
時の鳥取市内では一際目立つ建物であった。鶴田憲次¹⁶は、当時の印象を次のように書い
ている。

たしかに鳥取にきてこの図書館をみた時は、これはこの街のただ一つの威容だと思
った。そのころ（昭和五年）県庁も遷喬小学校もその前の伊藤病院も私の勤めていた
師範学校も、オランダ風のバルコニーのついた木造の建物で、明治の面影をそのまま
残していた。すべてが古風な街の風景の中で、この図書館だけがずば抜けて近代の感
覚と思想を象徴しているように見えた。¹⁷

また、鳥取図書館の建物は閲覧室と書庫の他、講堂や食堂、売店などを備えており、こ
れらの付属施設が、後述するように図書館活動の中で大きな役割を果たすことになる。

1931年7月18日、新図書館の開館式典が行われ、その後2日間の市民への一般開放を
経て、21日より閲覧業務を開始した。当時の新聞は、開館以来入館者が連日300人を超
え、大変盛況であったことを報じている¹⁸。

鳥取図書館での森の業務

鳥取に森が呼ばれたのは、NDCの考案者としての分類の知識が買われたためであった。
彼は間宮商店時代に、間宮不二雄が収集した個人文庫である「間宮文庫」をNDCによっ
て分類し、管理していたが、その内容は図書館関係の本に限られていた。だからあらゆる
分野の本をNDCによって分類することは、森自身にとっても初めてのことであった。開
館時の河野の説明によれば、旧市立鳥取図書館から引き継いだ資料のうち、未整理分を除
いた約18,000冊を閲覧に供しているとある¹⁹。森が鳥取を離れた1934年末の蔵書が約
40,000冊であるから、この間に整理された約22,000冊の分類の多くが、森によって行わ
れたと考えられる。しかし、森自身は鳥取時代の業務について、「分類のために入ったよう
なものです、その当時分類といっても一週間のうち半日くらいやれば事は終わるわけで、
目録もとればカウンターにも出る、それから諸会合」²⁰と述べており、分類よりもむしろ、
「図書館に関する具体的なことを、それぞれ体験」できたことが、彼のその後に大きく役
立ったと述べている。これに対して、神戸市立図書館時代は、分類のNDCへの切り替え
を担当したため3年間分類のみに専念し、森が分類に対して理解を深めたのは、むしろこ
の神戸時代であったと考えられる。

このように、職員数が出納手や小間使いも含めて 20 人程度、そのうち司書は 3 人という規模の鳥取図書館では、森は分類に限らず、行われていたほとんどの業務に関わっていた。それを踏まえて、開館後の鳥取図書館について見てゆきたい。

「図書館の屋根の下」のグループ

1931 年 11 月 1 日から 7 日にかけて、鳥取図書館では開館後最初の読書週間を迎えた。これに合わせて館内では図書、地元の古文書、絵画等の展示が行われ、開館後最初の大きな行事を見ようと多数の来館者が訪れた。

また、同じく 11 月 1 日には『鳥取図書館報』（以下『館報』）第 1 号が発行されている。これに寄せた記事の中で、河野は「我々館員は今後機会ある毎に図書館と一般社会との融合接触をはかりて、そこを公衆の慰安所とも、また一種の公会堂ともなして、清らかな慰安を静かに公衆の胸から胸へと伝えるやうにしたいと思っている」と述べているが、これは一般社会の中に進出し、利用者との結びつきの中に存在する図書館として、鳥取図書館が以後進んでゆく道筋を示したものと見える。これ以降、継続的に発行されているこの印刷物から、我々は当時の鳥取図書館の活動をかなり詳細まで知ることができる。

草創期の県立鳥取図書館の活動を特徴付けるのは、図書館を中心に作られた、いくつもの団体の活発な活動である。こうした活動を指して、『因伯時報』の記者である池田紫星²¹が映画「パリの空の下」をもじって作ったとされる²²「図書館の屋根の下」という言葉が、鳥取では広く使われるようになった。そうした団体のうち主なものは、「鳥取読書倶楽部」「館友会」「子供のための会」の 3 つである。

開館して最初の年が明けた 1932 年 1 月 9 日、鳥取図書館の食堂において、「鳥取読書倶楽部」（以下「読書倶楽部」）の初会合が行われた。この会は鳥取県知事、鳥取市長、鳥取高農校長、裁判官といった鳥取における政治、教育、経済など各界の名士や知識人約 50 名からなっていた。

この会の母体となったのは 1930 年 6 月に結成された、鳥取市内の各方面で活躍する知識人の団体「鳥取クラブ」であり、「読書倶楽部」は河野の呼びかけで、この団体が図書館の団体として生まれ変わったものであった。会則には「読書趣味ノ普及ト部員相互ノ知識交換ニヨリ鳥取県文化ノ向上ヲ図ル」²³ことを目的に掲げている。

会の運営の中心となったのは河野や、池田紫星、『鳥取新報』の荻原直正といった新聞人で、毎月一回夜に図書館の児童室に集まり、会員や外部から招いた講師の講話を聞くのが恒例であった。中には「読書しない」会員もいたというが、地域の名士たちの茶話会として図書館を育成する PTA 的な役割を果たした²⁴。森はこの「読書倶楽部」の書記に選ばれ、後に鳥取を離れるまでその運営に関与することになった。

さて、開館から一周年目の 1932 年 7 月 21 日に開かれた閲覧者懇談会で、「鳥取読書倶楽部」とは別に、図書館を中心とした閲覧者の「親しみある相互の研究懇談の機関」として、「館友会」を設けることが決定された。これに基づき、9 月 21 日夜に児童室において発会式と第 1 回例会が開かれ、85 名の会員中 40 名が出席した。会則によれば、「鳥取図書館に於ける閲覧者及図書館関係者を以って組織」される同会の目的は「読書趣味の普及と会員相互の親睦並に知識の交換を図る」こととし、事業として「A. 図書の紹介、批評、

推薦等 B. 講演会、研究会、座談会等の開催 C. 其他本会に於て必要と認むる事業」を行うとされている²⁵。

幹事は教育や新聞関係者など 10 名が担当し、図書館の河野、森、山下亮一が常任幹事として運営に加わることになった。会員からは毎月 5 銭の会費が徴集され、毎月一回の例会や講演会を行う他、新刊雑誌の回覧なども行った。例えば、1934 年 8 月 14 日から 19 日にかけて、図書館講堂で行われた「夏季女子青年講座」は、鳥取図書館と「館友会」主催による若い女性を対象とした教養講座であった。このときは、河野は「婦人と読書」、荻原は「新聞の見方」、鶴田は「女性と教育」といった具合に、図書館に馴染みの 9 名の講師がそれぞれの得意分野をテーマとした連続講演を行い、150 名以上の参加者を得て好評であった²⁶。

このように、「読書倶楽部」は図書館をバックアップする名士たちの集まり、そして「館友会」は図書館と利用者を結ぶ活動の中心として、両団体はそれぞれ異なる形で鳥取図書館にとって重要な役割を果たす団体になった。

「図書館の屋根の下」のもう一つの団体は「子供のための会」である。これは、鳥取図書館が開館 2 年目の読書週間の最中、1932 年 11 月 7 日に図書館児童室で発会式をあげた。このときの会員数は約 40 名、中心となったのは日赤病院小児科医長の中野義尚や鳥取師範学校教諭の鶴田憲次らであった。この会は研究部と事業部からなっており、毎月例会を開いて児童心理学など教育に関する研究を行う一方で、母親を対象とした座談会、子供を対象とした写生会や演劇会、野外での自然研究などを企画してその実践を試みた。これらの企画は評判がよく、会場に入り切らない数百人もの参加者がつめかけたこともあった²⁷。森は「子供のための会」の活動にも、創設時から幹事として関与することになった。

以上の 3 団体が毎月例会を開き、その都度準備のための幹事会があった。その他にも『館報』の編集や、読書週間などの催しの準備といった業務で、当時の森は「本当に忙しく、徹夜するようなこともしばしば」あり、「走りまわっていたというような格好」²⁸であったという。

主任司書河野寛治と図書館に集まるジャーナリストたち

開館時の鳥取図書館を事実上指導していたのは主任司書の河野である。県学務部長が館長事務取扱を兼務する慣例となっていたが、これは形式的なものであった。河野は 1881 年（明治 8）に岡山県英田郡に生まれ、早稲田大学の出身で坪内逍遙の教えを受けている。その後ジャーナリズムの世界に入り、『国民新聞』などの記者を経て、1914 年から『鳥取新報』の主筆を務めていた²⁹。後に紹介する『ふぐるま』によせた自己紹介では、「学校を出るとき逍遙博士に道草を食ふなど注意されたが、気が多いので道草又道草でひどい胃拡張にかゝってゐる」³⁰と書いている。彼が、どのような理由から司書への転身を決断したのか、今回はその詳細まで調査することができなかった。しかし、1930 年 4 月に鳥取図書館の司書となった河野は、鳥取高農図書館に 1 ヶ月あまり「留学」して図書館学の勉強をし、開館に向けた作業の指揮にあたった。特に分類には熱心であったようだ³¹。

彼は人物としてはやや地味であったのか、それとも若くして病死したためか、彼に関する記述は現在多くを見出すことができない。しかし、河野なしに開館後数年間の鳥取図書

館の活発な活動はまず考えられない。先に述べたように、岡山にいた森を見出し、鳥取に誘ったのも河野であった。

河野は、ジャーナリスト出身らしく『館報』に毎回のように自ら記事を執筆している。それらは、社会教育機関としての図書館の役割、県内の文庫や公立・私立図書館におけるNDCによる分類の統一などをテーマとして扱っている。河野は毎年出席していた全国図書館大会など、常に外部から最新の知見を取り入れようと努めていたようであり、それを彼の記事からも読み取ることができる。

河野が元ジャーナリストであったため、また、鳥取図書館の斜め向かいが『因伯時報』の建物だったこともあり、図書館に集まる文化人には新聞記者が多かった。彼らは、連日図書館1階の食堂にたむろしてコーヒーを飲みながら議論をたたかわせたため、この食堂は地域の文化人たちのたまり場として知られることになった。そのメンバーには『因伯時報』の池田紫星、笹尾誠二、大久保弘、『大阪朝日新聞』の沢田三郎、後に『日本海新聞』の編集長となる涌島義博、そして中野義尚、鶴田憲次、河野といった顔ぶれがあった。特に池田は図書館で購入する新刊書の選定や、社会活動といった面で、河野を助けていたとされる³²。池田は戦後、「読書倶楽部」について次のように書いている。

幹事としての私どもは「読書倶楽部」の性格をどのようなイデオロギーにも縛らなかつた。企画は幹事会で定めたのであるが会の運営はきわめてリベラルで図書館のPTAではあつても何のポリチツクスもなかつた。その意味で館友会にくらべて高踏的だと非難されながらも今はやりの民主的な雰囲気が会の空気であつたといえる。³³

また、後に県教育長などを務めた鶴田憲次は次のように書いている。

のちに世間で「図書館には烈しい自由主義の集団がある」と噂され、特高からまでマークされた「図書館の屋根の下」も、実はそんな組織だった会があつたわけではない。何となく読書にあいて行ってみると、いつも見なれた顔がコーヒーを飲み、議論しているというぐあいの、いわば行きずりの集会にすぎなかつた。しかしのちにはそれが段々レギュラー化して、やはり社会批判の討論会のような形になって行つた。【中略】

とくに当時ようやく迫ってくるファシズムの圧力に対する反発は痛烈だった。ファッションの波に乗ろうとするいわゆる時局便乗の官僚や議員も商人も、ここでは完膚なきまでに批判され、場合によってはそれが翌日の新聞紙上で審判されることすらあつた。³⁴

全国的にデモクラシーの気運が高まった大正期に、鳥取市でも、市政における政党間の対立を背景に自由な言論の空気が高まり、電力の市営化要求に代表されるような市民運動が起こり³⁵、また、県内各地でストライキや小作争議が頻発した³⁶。こうした市民の間の言論をリードしたのが鳥取の地方新聞で、特に政党機関誌的な性格を帯びていた『鳥取新報』『因伯時報』の2誌の間では激しい論戦が交わされ³⁷、ときには官憲の取り締まりにさえ抵抗することを辞さない空気があった。昭和の初めに入っても、まだこうした空気は色濃

く残っており、図書館に集まった記者たちは、軍国主義色を強める当時の世相に対して批判的であった。そのリベラルな主張は図書館をめぐる「図書館の屋根の下」の団体全体の論調を特徴付けていた。

こうした「図書館の屋根の下」の団体の論調は、後に紹介するように『ふぐるま』で時局批判的な記事を書く森にも影響を与えていたのではないかと想像される。

巡回文庫の開始

関連団体の活動と並んで、鳥取図書館の活動のもう一つの柱となっていたのは巡回文庫である。山口県立図書館で佐野友三郎が活発に巡回文庫の活動を行い、それが大正期に全国各地に波及したことがよく知られている。鳥取県ではそれまで、地域的な小規模の巡回文庫は存在したものの、県内全域をカバーする巡回文庫はまだ存在しておらず、その点では他県に大きく立ち遅れていた。

鳥取図書館は既に開館時から、「館則第二十四条」として巡回文庫の実施を活動内容に盛り込んでいた。開館後の整理業務に一区切りがついた 1932 年春頃から、巡回文庫設置に向けた動きが強まっている。河野は『館報』第 3 号（1932 年 3 月）に「本館の蔵書と巡回文庫」、同じく第 4 号（1932 年 5 月）に「巡回文庫の利用について」という記事を寄せ、巡回文庫開設の意義を説き、目下それを準備中であることを報じている。同年 6 月 22 日から 24 日にかけて、森は中島勲司書とともに、巡回文庫開始のための関係者との懇談会と業務研究会のため、倉吉、米子、根雨に出張している。

1932 年 9 月 11 日、鳥取図書館の巡回文庫が開始され、最初の文庫が発送された。発送先は米子市の県立商蚕学校をはじめ、県内 12 ヶ所の学校や私立文庫などであった。これに続いて、同年内に合計 35 ヶ所、さらに昭和 7 年度末までには、県内 47 ヶ所に 54 個の巡回文庫で 1732 冊の本が送られている。

『館報』第 31 号（1934 年 12 月）に、「貸出文庫の利用に就て」という記事が掲載されている。それによれば、貸出文庫³⁸の送付先は「市町立の公立図書館と管理の確実と認められた私立図書館、青年団又は之に準ずる教化団体及公私立学校」であり、一ヶ所につき一個ずつを送り、停留期間は 3 ヶ月とされている。一つの文庫は約 30 冊で構成されており、配布された「貸出文庫目録」をもとに受け取り側から、希望図書や希望の編成を指定してもらい、特に希望がない場合は、鳥取図書館側が発送先の地域に応じて図書の選定を行った。文庫の送付は郵送により、「当分の間」送料のみ鳥取図書館が負担するとされている。また、文庫の設置団体に対して、ポスターや票札によって文庫の設置を付近住民に周知するよう求めている。森はその後、上海の華鉄図書館でも、1939 年 11 月に着任早々、日本人社員を対象とした巡回文庫を実施しており³⁹、その際にこうした巡回文庫立ち上げの経験が生かされたと思われる。

巡回文庫については、山口県立山口図書館の試みが全国各地に広まる過程で、特に内務官僚や教育官僚の関与により、佐野友三郎が意図していた理念が無視され、その形式だけが広まっていったとする批判がある⁴⁰。例えば、大正期にいくつかの県で行われた、全ての地域に画一的に同じ内容の巡回文庫を送る方式には、文部省主導の思想統制の色合いが濃い。鳥取図書館では、上述した受入れ側からの希望に応じる方式を採用した。これは

山口図書館で行われていた方式であり、本来の巡回文庫の意図を汲んだものといえる。

また、河野は鳥取図書館での巡回文庫実施について、「巡回文庫は、つとめて地方々の状勢と環境とに順応するやうに致したいと思つて居ります。八頭郡や日野郡等の奥部に廻付する巡回文庫に対しては、林業及び林産物に関する図書が多からしめねばならないと同じ理由で、弓浜部等の養蠶地には蠶業に関する書籍を選択廻付する必要があります…」⁴¹と述べている。このような、地域によりその土地の産業に関する実用書を重視するやり方は、彼が、鳥取県の地に図書館サービスを普及させるために打ち出した特色でもあった⁴²。こうした方法が功を奏したためか、全国的に巡回文庫が一時的な盛り上がりで衰退する中、鳥取図書館の巡回文庫は、その後太平洋戦争の始まる 1941 年まで利用冊数を大幅に減ずることなく維持している⁴³。

石井敦は、巡回文庫の山口県での成功と、千葉県などでの失敗の違いは、「巡回文庫の主体が図書館か役所かの相違からくる」⁴⁴と述べているが、鳥取県で先に述べたような巡回文庫が実現した理由の一つも、鳥取図書館が図書館としての独自の考えを持ち、主体的に運営に臨んだことにあると考えられる。

同様のことは、鳥取図書館の活動全体についても指摘することができるのではなかろうか。大正末から昭和初めにかけての時期は、図書館界が明治以来の、国民の教養と知識向上に資するための啓蒙的役割から、忠良なる国民を育成するための社会教育施設としての教化的役割へと変えられてゆく、また、変わってゆく転換期であった⁴⁵。その中であって鳥取図書館は、あくまで図書館本来の役割を見失うことなく、その歴史の中でも注目に値する活発な活動を行うことができた。河野は鳥取図書館の運営について、明確な自己の考えを持って臨み、彼はそれを『館報』に執筆した記事などで常に内外に対してアピールしていた。こうして作り出された図書館の主体的な姿勢が、先に述べたような「図書館の屋根の下」の団体のリベラルな空気とも呼応して、鳥取図書館を、社会教育機関としての図書館を「国民教化」「思想善導」の手段として利用しようとする、内務官僚や教育官僚の介入から守る結果につながったと筆者は考える。しかしながら、こうした鳥取図書館の活動も、後述するようにわずか数年の後には大きな変化を遂げることになる。

町村立図書館網の整備に向けて

さて、森は 1932 年 3 月 31 日付で鳥取図書館の司書となり、月給は 30 円となった。また、遅くとも 1933 年 5 月までに、住まいを鳥取市下横町 1-1 永見方に移している⁴⁶。1932 年の読書週間には、間宮不二雄が鳥取を訪れ、11 月 3 日夜、早稲田大学理事の平沼淑郎とともに鳥取図書館講堂で講演を行った。間宮の演題は「自力更生と図書館の使命」で、約 500 名がこれを聴講している⁴⁷。森にとって、間宮の来鳥は嬉しい出来事だったのであろう。

1933 年 5 月 6 日から 15 日にかけて河野が東京と名古屋へ、図書館長会議と全国図書館大会出席のため出張しているが、5 月 11 日から 13 日にかけて名古屋で行われた全国図書館大会へは森も同行した⁴⁸。

1933 年 6 月の図書館令の改正を受け、同年 11 月 22 日、鳥取図書館は県の中央図書館として指名を受けた。巡回文庫がようやく定着してきたこの時期、河野にとって次の関心事となったのは、町村立図書館の建設により、県内の図書館網をさらに整備し充実させる

ことであった。これより約 30 年前、佐野友三郎は、山口県で巡回文庫を先駆として町村立図書館網の整備を実現させたが⁴⁹、河野はこれと同じことを鳥取県で目指したといえる。

その翌 1934 年 1 月の『館報』第 20 号では、河野は皇太子誕生の記念事業として、町村立図書館の建設を提唱し、それに引き続いて同第 21 号から第 23 号にかけて、彼は繰り返しこのことを訴えている。この年 3 月 12 日から 19 日にかけて、森は中央図書館としての事業を視察するため、山口、福岡、佐賀、熊本、大分の各県へ出張しているが⁵⁰、その目的にも町村立図書館網の調査が含まれていたであろう。

1934 年 8 月 10 日の県条例等の改正により、図書館令施行細則他、町村立図書館の設置に関する諸規定が公布された。河野にとって、これは鳥取県の町村立図書館の整備につながる大きな一歩であった。しかし、こうした努力が結実し、鳥取県で本格的に公共図書館網が整備されるのは、戦後になってからのことである。

『ふぐるま』の刊行

1933 年 5 月、森が後年たびたびその思い出を語る『ふぐるま』の創刊号が発行された。森の記述によれば、はじめ図書館内の職員だけで自由誌を作ってはどうかという話から、館外の利用者も参加した形で定期的に冊子を発行することになり、図書館の森、中島勲、大阪毎日新聞の記者松原名治が世話役となった⁵¹。

創刊号の冒頭に記された発刊の趣旨によれば、「近頃われわれはものを知る方法として耳からの機会と目からの機会を多分に持っている。しかるに、ものを言う機会はまことに少ない」ため、「会員諸氏にもものを言う機会をつくり、それによつてお互いが、人を知り、季節を知り、世紀を知るに些かの役立ちをなす」ことを、『ふぐるま』の目的としている。

『ふぐるま（文車）』の名は森によって「徒然草」の歌からつけられたものだが、創刊号に「われわれのふぐるまは今や象牙の塔を出でて街頭にその使命を果さんとしている」とあるように、この名には新しい図書館活動への意欲も込められていた。なお、森はこの名がかなり気に入っていたようで、後に上海の華鉄図書館時代、華中鉄道機関紙の図書館の頁にも「ふぐるま」のタイトルをつけているし⁵²、後年「埋め草を頼まれたときには『ふぐるま』を見出しと」したという⁵³。

内容は雑文、連載小説、和歌、俳句などからなり、毎月発行された。前号で「5 年前の僕」「初秋」「鳥取を語る」といったテーマを出しておき、それについて各人が記事を書くということもやっていた。鳥取新報印刷局で印刷された A5 版 20 ページ程度の体裁は、私的な出版物としては立派なものといっていいただろう。『ふぐるま』は、当時の図書館をめぐる人々一人ひとりの顔が見えてくる、ほとんど唯一の文献であるという点からも興味深い。

『ふぐるま』の寄稿者から成る「ふぐるま会」の会員数は、初号の名簿では鳥取図書館職員を中心に 12 名であったが、徐々に会員を増やし、1934 年 11 月号の名簿では会員数は 75 名となっている。その内訳は 12 名が記者、次いで教育関係 11 名、公官吏 11 名、図書館員 10 名などとなっており、この頃には県外から会員として投稿する者もあった。森が「大部分が私たちと同じ二十代」⁵⁴と述べているように、若手のメンバーが多く、「館友会」の下部組織的な性格をも持っていた。1934 年 1 月 16 日、「ふぐるま会」の最初の集会在、図書館の食堂で開かれ、投稿者たちが一堂に顔を合わせる初めての機会となった。

その後、5月25日に2回目の集会在設けられている。

記事の作者名はペンネームで掲載されており、森清は「緑郎」「三木一郎」「机龍之介」のペンネームで頻繁に寄稿している。森の寄せたいくつかの記事には、彼一流の反骨気質がよく表れており、特に彼の時局に対する批判的な立場が読みとられるものがある。例えば「非常時、図書館までもが非常時か」⁵⁵「鳥取でも防空演習に燈火管制を行うと。消す燈を探し廻るに骨の折るやうな街であっても」⁵⁶といった記事が、彼のペンネームで掲載されている。また「初めての甘さを知つてる中之島」⁵⁷といった、森のプライベートを感じさせる俳句を見出すこともできる。

また、『ふぐるま』に掲載された会員の自己紹介の中に、森が書いたものがあり、当時の彼の人となりを感じさせる文章なので引用してみる。

一九〇六年生。「日本十進分類法」と題する著作を持つといふ以外に、何の取柄もなき只野凡児。大阪に於ける店員生活と、憂鬱な恋愛を解消して、郷里岡山に遁世すること半年、昭和六年六月河野氏の世話で鳥取に赴任す。風采の揚らざること“線香に衣つけたるが如し”と評せらる。極度の近視眼。性格は短気、気儘。趣味は蒐集と喫茶。現在は市内横町、永見氏方に寄寓す。職業は鳥取図書館の司書である。⁵⁸

やがて森が鳥取を離れることになり、1934年12月号の「ふぐるま」にも、その告知が短く掲載された。年が明けて、1935年2月号には、森の勧誘によるものか、神戸市立図書館長の神波武夫をはじめ、4人の神戸市立図書館職員の名が新入会員として紹介されている。ところが、この1935年2月号で『ふぐるま』の発行は突然中止されている。刊行中止を仄めかす記述はどこにも見当たらず、何がきっかけであったのかは判然としないが、編集担当の森が神戸に移った3ヶ月後のことであり、彼に代わって編集の労をとる人物がいなかったことがその原因と考えて間違いないだろう。

なお、戦後になってから『ふぐるま』が一時再刊されていた時期があった。この再刊『ふぐるま』は、1951年3月に初号が出され、その後半年ほど続いている。内容は初代の『ふぐるま』を多分に意識していたようであるが、体裁は活字ではなく手書きの原稿を印刷したものである。その中に、初代『ふぐるま』の参加者の回想記が2本掲載されているのが興味深い。そのうちの一つに蓮佛重寿が、やはり森について次のように書いている。

[『ふぐるま』の]体裁にしても、編集にしても、すべての企画なり実施なりが森清によってなされたと思っている。

森は初代館長の河野寛治がどこかから引張って来たもので、随分仕事のできる人だったのに、給料はそう沢山でなかった様子だった。

“日本十進分類法”といふ図書の分類は、森の創始(?)で、既にその著書もあった。そうして全国の大ていの図書館が、この分類を用ひていた。

かゝる分類の手際⁵⁹のよき需理は事務の全般に行渡っていた。能率は高度に発揮された。月々の館報にしても、毎年一度の図書館週間の記念開[一字不明]にしても、気持ちよく進行する。⁵⁹

鳥取時代の森が、NDC の発案者であったことよりも、むしろその仕事ぶりによって周囲の人々から敬愛されていたことが窺われる。また、『ふぐるま』の刊行中止が森の不在によるものであることをも、この記事は示唆している。

『ふぐるま』が再刊された 1951 年は鳥取図書館の開館 20 周年にあたり、各種記念行事や記念出版が行われる中で、「図書館の屋根の下」の時代の活発な活動が人々の間で思い起こされた時期でもあった。再刊された『ふぐるま』にも、草創期の鳥取図書館の活動が、後の時代の人々に残した影響を見て取ることができる。

森の転出と、その後の鳥取図書館

1934 年 11 月、森は鳥取図書館から神戸市立図書館に移ることになった。神戸市立図書館では、書庫の増築に合わせて分類を NDC に切り替えることになり、その作業のため、大阪の青年図書館聯盟時代から森の知己であった、神戸市立図書館館長の神波武夫⁶⁰から就職の誘いを受けたことがきっかけであった。「神戸は大阪に近く父も大阪に居るし、また、NDC の育成のためにも望ましいと考え」⁶¹、森は鳥取を去る決意をした。

12 月 3 日夜、「ふぐるま会」「館友会」の共同主催による森の送別会が行われ、40 名がこれに出席した。そして、50 人を超える人々に駅のホームで見送られながら⁶²、森は鳥取を後にしたのである。

森が鳥取を去った翌年、1935 年 8 月に河野寛治は鳥取図書館の初代専任館長に就任し、名実ともに鳥取図書館の運営の責任者となった。しかし、館長就任から 1 年も経たない 1936 年 4 月 11 日、河野は病気のため急死している。享年 56 歳であった。『館報』第 47 号（1936 年 4 月）には顔写真入りで河野の逝去を報じる特集記事が設けられ、同じく第 48 号（1936 年 5 月）では中島が後書きに、「ご覧の通り去る 2 月以来巻頭言の執筆がない。河野前館長の病臥のためであるが非常に淋しい感じがする。それは外形的だけでなく、それが直ちに我々の主張であつただけに。」と記している。河野が鳥取図書館にとってどのような存在であったのかが、よく表れた一文である。河野の逝去に殉じて、同年 4 月 16 日には「子どものための会」解散が決議された。河野の死は鳥取図書館の歴史の一つの転換点でもあった。

河野の死後、1936 年 8 月に栃木県教育会図書館から、安藤宣保が鳥取図書館の司書に迎えられた。これ以降、鳥取図書館の運営は安藤を中心に、中島がこれを補佐する形で進められている。特に中島は『館報』に頻繁に記事を書くなど、河野の遺志を継ごうと努力している様子が見受けられる。この年 10 月 7 日には、前年から企画されていた「鳥取県図書館協会」設立が実現した。

しかし、1937 年 11 月の読書週間を境に『館報』の記事は一変し、俄かに時局色を濃くしている。この読書週間には、帝国図書館長の松本喜一が鳥取図書館を訪れていた。彼は 11 月 3 日、講堂に於いて「文化と戦争」と題する講演を行い、約 400 名がこれを聴講している。この年の読書週間は、例えば「記念童話会」では銃後美談、戦争逸話など全て時局に関する話が取り上げられ、「時局関係図書五十種を読者の眼前に突付けるため目録室に展列」⁶³するなど、戦時色の非常に強いものであった。この前後における松本の行動や発

言⁶⁴から考えて、こうした企画が彼の意向を反映したものであったことは、容易に推測される。これ以降「前線慰問文庫」の発送など、鳥取図書館の業務は一気に時局色の濃いものとなっている。

1937年7月に勃発した日中戦争が、長期化の様相を見せ始めたこの時期、同年11月の中央図書館長協会の総会・協議会や、翌1938年5月の全国図書館大会で「国民精神総動員運動」への協力事項に関する決議が行われ、図書館の国策への迎合・協力という方向が定まっていった⁶⁵。その後、終戦に至るまでの図書館活動については、思想統制に重きをおく「読書指導」の導入⁶⁶に代表されるように、「専ら指導・統制のみに力が注がれ」「みるべきものはあまりない」⁶⁷と今日批判されることが多い。

河野館長時代までは、こうした流れとは一線を画していたように見えた鳥取図書館も、この時期から全国の多くの図書館と同様、その自立性を失い、国民への思想的な「指導・統制」の先鋒としての道を歩まざるを得なかった。またそれと同時に、図書館を中心としたジャーナリストなどリベラルな文化人たちの活動も、国民への思想統制が強まる中で、次第にその実を失っていった。

森清にとっての鳥取図書館時代

一方、1934年の暮れに鳥取を離れた森は、その後神戸市立図書館の司書を1938年2月まで勤め、その後大陸に渡って上海日本近代図書館、華鉄図書館での勤務を経、戦後は国会図書館の司書として長年活躍したことは周知のとおりである。しかし、こうした森のその後の経歴を見てみると、彼自身も語っている⁶⁸ように、「終日分類ばかりに終始」⁶⁹したという神戸時代をはじめ、整理畑がそのほとんどであった。森にとって鳥取図書館時代は、利用者の間に存在するという図書館の原点を身を持って体験することのできた、ほとんど唯一の時期であったといえる。

これまで見てきたように、森が在職した開館後数年間の鳥取図書館は、河野という優れた指導者のもとで、地元の文化人、各界の人材を糾合し、まさに地域文化・社会教育の中心として、活発な活動を展開した。それは県立鳥取図書館がその歴史の中で、最も輝いていた数年間であった。その活動は、大正期のリベラルな思想の影響のもと、巡回文庫などに見られるように、それまでに日本の図書館界の先駆者たちが築き上げてきた図書館理念を、鳥取という一地方において一つひとつ実践してゆく過程であったともいえる。そして、当時まだ20代であった森は、そうした活動の中で強い感化を受けるとともに、彼自身もまたその中で大きな役割を担っていたのである。そして、その後の森は、鳥取図書館時代の経験をもとに、「図書館人」として、NDCの普及・育成という彼のライフワークに取り組んでゆくことになる。

なお、旧鳥取図書館は1990年（平成2）まで現役の図書館として使用された後、内部改装されて、現在童謡とおもちゃに関する博物館「わらべ館」となっており、今でも外観は建設された当時の面影を残している。市内の尚徳町に新たに建設された鳥取県立図書館は、こちらも市内で一際人目を引く施設であるが、外観のみならず、県内全域の図書館を結ぶ流通システムなど、そのサービス活動においても現在全国的に注目されている。同図書館が、創立当時の精神を受け継ぎ、今後も活発な活動を続けられることを期待したい。

最後に、本論を書くにあたって、鳥取県立図書館に資料面で大変お世話になったことを付記しておきます。

- 1 1906 - 1990 (明治 39 - 平成 2)。彼の名前は一般的に「もり・きよし」と表記されるが、本論では戦前に使われていた「森清」に統一した。
- 2 鳥取県立鳥取図書館『砂郷文化：鳥取県立鳥取図書館報』No.7, 1951.12, p8.
- 3 鳥取県立鳥取図書館『鳥取県立鳥取図書館三十年史』1961, p23-39.
- 4 もり・きよし『司書 55 年の思い出』もり・きよしを偲ぶ会, 1991, p61.
- 5 もり・きよし[述]「NDC と私：NDC の経緯を中心に図書館人としての 50 年の回想」『同志社大学図書館学年報』17, 1991.6, p2-32.
- 6 2006 年 9 月 9 日、甲南大学を会場に日本図書館研究会の研究集会として同シンポジウムが行われた。
- 7 『ふぐるま』(鳥取県立図書館編『鳥取図書館出版物 4』所収) Vol.2 No.1, 1934, p16.
- 8 前掲, もり[述]「NDC と私」, p12-13.
- 9 1890 - 1971 (明治 23 - 昭和 46)。間宮商店店主、青年図書館聯盟書記長。
- 10 前掲, もり『司書 55 年の思い出』, p13.
- 11 同上, p13.
- 12 高多彬臣「遠藤董と鳥取県立鳥取図書館の創立」『鳥取女子短期大学研究紀要』No.41, 2000.6, p15-27.
- 13 1907 年 (明治 40)、皇太子 (後の大正天皇) 巡行のための宿舎として鳥取城跡に建てられた洋館。
- 14 細川隆『鳥取図書館沿革誌稿』(私家版, 鳥取県立図書館蔵), p68.
- 15 鳥取新報社『鳥取新報』昭和 6 年 7 月 18 日, 3 面.
- 16 1904 - 1981 (明治 37 - 昭和 56)。鳥取県教育長、ラジオ山陰東京支社長などを歴任。
- 17 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館三十年史』, p101-102.
- 18 前掲, 『鳥取新報』昭和 6 年 7 月 25 日, 2 面.
- 19 同上, 昭和 6 年 7 月 18 日, 3 面.
- 20 前掲, もり[述]「NDC と私」, p18.
- 21 1896 - 1956 (明治 29 - 昭和 31 年)。本名は池田糸郎 (いけだ くめお)。『因伯時報』や『日本海新聞』の主筆を務める。
- 22 鶴田憲次『流るる雲と人』牧野出版, 1970, p26.
- 23 鳥取県立鳥取図書館『鳥取県立鳥取図書館報』No.3, 1932.3.
- 24 前掲, 『砂郷文化』No.7, p9.
- 25 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館報』No.6, 1932.9.
- 26 鳥取県立鳥取図書館『鳥取県立鳥取図書館 50 年誌』1981, p105.
- 27 前掲, 『砂郷文化』No.7, p10.
- 28 前掲, もり[述]「NDC と私」, p17.
- 29 新日本海新聞社鳥取大百科事典編集委員会編『鳥取県大百科事典』新日本海新聞社, 1984, p63.
- 30 前掲, 『ふぐるま』Vol.2, No.1, p19.
- 31 前掲, 『砂郷文化』No.7, p10.
- 32 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館三十年史』, p103.
- 33 前掲, 『砂郷文化』No.7, p.9.
- 34 前掲, 鶴田『流るる雲と人』, p26-27.
- 35 湧島義博『郷土と新聞のあゆみ』鳥取市教育福祉振興会, 1980, p295-297.
- 36 同上, p305, 311.
- 37 『鳥取新報』は民政党、『因伯時報』は自由党の、鳥取県における政党機関誌的な性格を持っていた。

-
- 38 鳥取図書館では 1933 年 8 月改正の図書館令に倣い、同年 11 月から「巡回文庫」の名称を「貸出文庫」に改めた。
- 39 米井勝一郎「華中鉄道図書館——森清（もり・きよし）の上海時代」『図書館文化史研究』No.23, 2006.9, p90.
- 40 石井敦「佐野理念の転換過程——我が国の巡回文庫の頽廢化の歴史Ⅱ」『図書館学会年報』Vol.6, No.2, 1959.10, p66.
- 41 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館報』No.3, 1932.3.
- 42 河野は鳥取図書館の蔵書について、『館報』5号（1932年7月）でも「本県のような土地柄においては、つとめて産業方面、わけても農業方面の図書を多数蒐集したいと心がけております…」と書いている。
- 43 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館三十年史』, p138-139.
- 44 同上, p60.
- 45 岩猿敏夫『日本図書館史概説』日外アソシエーツ, 2007.1, p205-206.
- 46 前掲, 『ふぐるま』No.1, 1933.5. 下横町は、現在の鳥取市片原と玄好町の旧袋川沿いの一部。
- 47 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館報』No.7, 1932.11.
- 48 同上, No.13, 1933.6.
- 49 石井敦「公共図書館の百年——活動を中心に」『現代の図書館』Vol.6, No.4, 1968.12, p174.
- 50 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館報』No.23, 1934.4.
- 51 前掲, もり『司書 55 年の思い出』, p16.
- 52 前掲, 米井「華中鉄道図書館——森清（もり・きよし）の上海時代」, p93.
- 53 前掲, もり『司書 55 年の思い出』, p17.
- 54 前掲, 『鳥取県立鳥取図書館三十年史』, p92.
- 55 前掲, 『ふぐるま』No.2, 1933.6.
- 56 同上, No.10, 1934.2.
- 57 同上, No.2.
- 58 同上, Vol.2, No.1, p16.
- 59 『[再刊]ふぐるま』Vol.1, No.3, 1951. 5, p3-4. （鳥取県立図書館編『鳥取図書館出版物4』所収）
- 60 神波は 1932 年（昭和 7）3 月 24 日に鳥取図書館を訪問している。彼は鳥取県東伯郡の出身であった。
- 61 前掲, もり[述]「NDC と私」, p17.
- 62 前掲, もり『司書 55 年の思い出』, p17.
- 63 鳥取県立鳥取図書館『鳥取県中央図書館報』No.67, 1937.12.
- 64 奥泉和久「戦前の図書館における「読書指導」の導入について——1935~1940 年」『図書館界』Vol.44, No.1, 1992.5, p10.
- 65 同上, p6.
- 66 同上, p2-3.
- 67 前掲, 石井「公共図書館の百年」, p181.
- 68 前掲, もり[述]「NDC と私」, p17.
- 69 前掲, もり『司書 55 年の思い出』, p18.